

An abstract painting featuring large, textured brushstrokes in deep red and dark green against a light, off-white background. The red shapes are located in the upper left and right, while the green shape is in the lower right. The overall style is expressive and painterly.

男の花弁

黒岩重吾



男の花弁

黒岩重吾



青樹社



男の花弁

著者〓黒岩重吾

発行者〓土井 勇

発行所〓株式会社 青樹社

東京都千代田区三崎町二一六―七 郵便番号一〇一
電話東京二六四―六九〇二・二六四―六九〇四 振替東京四七六四八

印刷所〓有限会社 八光印刷

製本所〓土開製本株式会社

落丁・乱丁本はお取り替え致します

◆定価・発行日はカバーに表示してあります

男
の
花
弁

目次

男の花弁	五
虹の十字架	五
冷凍の部屋	九
機械の野望	一四
花と骨群	一八
沼の花影	二四

男の花弁

1

日本舞踊清川流の取り立て師匠、清川秀麗の本名は、坂田実である。

坂田実の生家は大阪新町の近くにあった。新町堀江は、往時の色街である。色街と言っても遊廓ではない。堀江芸者で名を売った一流の色街である。

だが、坂田実の実家は、新町の近くだと言っても、汐見橋の傍のごみごみした一角で、鉄屑屋とか、行商人とか、普通の社会では陽の当たらない職業の人達が住んでいた。

坂田実の父春男はあんまである。戦前の新町堀江に良く出入りしていた。母は小さな一杯飲み屋をやっていた。屋台に毛の生えたようなもので、

客は肉体労働者達が殆んどである。

母は勢子と言い、父よりも四歳年上であった。勢子が春男と結婚したいきさつを、実とは知らない。勢子は大柄な唇の厚い、明らかな醜女であった。春男は盲目ではあったが、ほっそりした美男子だったようである。父は実が十二歳の時に、空襲で焼け死んだ。母だけ助かった。

勢子は戦後、米の運び屋などをしながら、実を育てた。

実は小学校時代から、稚児さんと教師に呼ばれたほど美しかった。昔の日本が、色男と呼んだ典型的な優さ形の美男である。

色は女のように白く、切れ長の眼の中の瞳は黒く、唇は赤い。だが眉だけは不思議に太く、釣り上がっていた。父が亡くなって、初めて実会った人々は、勢子が母親だと言っても信じなかった。現に終戦直後間もなく有名な財閥の子供がさらわれた時、警察に投書があり、実がその財閥の御曹子ではないか、と調べられたほどであった。勢子が誘拐したという投書があったのだ。戦争

が終わるまで、実も政府命令で疎開させられている。兵庫の山奥であった。

田舎の子供達が苛める相手として、実は恰好の相手であった。だが、不思議なことに、実の場合は、庇護者が現われた。それはどんな時でも、子供達の中で、最も実力のある餓鬼大将であったり女教師であった。

餓鬼大将と女教師のおかげで、実は最も苛められるべきタイプでありながら、反対に楽な生活を送れたようである。

そんな女教師の一人に、相沢とみが居た。三十五歳の独身の女性で、勢子ほど醜女ではないが、それに近い頑丈な農婦タイプの女教師であった。実はとみによって、性について開眼させられている。十一歳の年であった。

勿論、まともな男女の関係ではない、手技による遊びである。

「実ちゃんは将来、舞踊家になりなさい。日本の踊りよ、実ちゃんだったら、日本一の舞踊家になれるわ」

相沢とみが、実に何故舞踊家になるようにすめたか、実は今でも分からない。

しかし頭の良い余り美しくない女性がのびのびと生活出来る世界は、教師の場が最適であるように、稚児さんのような実が生き得る世界は、日本舞踊しかない、と相沢とみは、本能的に思ったのではないか。

おそらく相沢とみは、日舞の世界が、どんなものであるかも知らず、言ったのであろう。だが、疎開先での相沢とみの言葉は、実の脳裡に焼きついて離れなかった。実は、頭は悪い方ではない。小学校の成績も十番以内であった。不思議に踊りは好きである。

戦後、掘立小屋のような家に住みながら、小学六年の坂田実は、自分が出世する道は、日舞の世界以外ない、と深く思い込むようになった。いや出世といった、はっきりしたものではなく、憧れであったのかもしれない。

母の勢子は実が小学校を出た年、なんとか、もとの屋台に近い一杯飲み屋を経営出来るようになった。

った。勢子はおそろしく、生活力の旺盛な女であった。実は、父の美貌と、母の勝気さを兼ね備えていたようだ。

「日舞を習いたいんや」

中学に入った時、実は勢子に言った。その時、勢子は飛び上がらんばかりに喜んでゐる。

「お母ちゃんはな、お前をなににしようかと何時も気に病んどったんや、お前が女やったら、文句なしに芸者にするんやけど、堀江の一流の芸者にな」

「お母ちゃん、僕が女やったら芸者にはならんわ、千万長者の息子を引っ掛けて、大家の奥さんになつたる」

勢子はぽかんと口を開けた。この時勢子は、切れ長の眼の中の、黒曜石のように美しい実の瞳が、鋭い光を放っているのに初めて気付いたようである。

勢子は直ぐ新町の置屋に飛んで行った。昔、あんまである春男をひいきにしてくれた芸者の幾人かが、ねえさん株で残っている。

勢子はその一人に、実を日舞の舞踊家にしたいから、適当なお師匠さんを世話してくれ、と頼んだ。その芸者は、実の顔を覚えていた。春男が連れて歩いている小学二年の実と一度だけ、会ったことがあるのである。

「春男さんの息子さん、綺麗になりはったやろな、明日にでも連れておい出な」

翌日、勢子は実を連れていった。彼女は実の顔をつくづく眺め、嘆声を洩らした。

「可愛いがられはるで、お師匠はんに」

「お金は、そんなにありまへんけど、出来るだけのことはしますよ……穢い服着てますけど、お金だけつくります」

勢子は、顔を疊にすりつけ言った。

だが、幾ら実が美貌でも、一杯飲み屋の息子であれば、そんなに上筋の師匠にはつけない。その芸者が紹介したのは、清川流の名取りである清川満州であった。

日舞の世界には、色々な流儀があるが、花柳流、藤間流が現在最も栄えているようである。清川流

はその次ぐらいだろうか。

だから、かなりの名の通った存在であるが、花柳、藤間流との格差がかなり酷い。それは、普通は一人であるべき家元が神戸、大阪、京都、東京と十軒もあり、各家元同士の内紛が絶えず、花柳流などでは無数に居る取り立て師匠も、清川流では頂家や家元が自分の権力、収入を守るため余りつくりたがらず、階級差を厳格にし、時代遅れの方針を取っているためである。

たとえば、噂によれば花柳流など、師匠が弟子に対して、自分より優れた踊り手になるように、と言ひ、名取りになつてからの、新作の振り付け、案舞など、自由に許すが、清川流では、名取りになると、誓約書を出さす。それには、なにに、すべからず式のものが多く、芸術家として最も意欲を燃やす、新作の振り付け、すなわち、新しいものを創造し作舞するには、頂家、家元の許可がない限り出来ないような厳しい条件をつけている。つまり頂家、家元は自分の存在をおびやかされるのを怖れて、そのような条件をつけているの

だが、これでは良い弟子が少なくなり、栄える筈はない。万事明るくおらかな花柳流が今や全盛を極め、清川流が落日の運命にあるのも無理はなかった。しかし歴史がある流派だけに名門も多く、全国に散在する末弟の総数は、数十万と言われている。

日本古来の、このような伝統芸術は、茶道と同じく、本家とか家元がピラミッドの頂点を占め、その権威は絶対的であつた。

だから、本家、家元になるのは血縁関係のもので、血縁関係の無い者は、どんなに優秀でも、取り立て師匠になれるのがせいぜいだった。

ところが、清川流では、この取り立て師匠さえ、余り増やさないようにしている。

清川流の発生地は大阪であつた。清川流では、本家のことを、頂家と言つた。

つまり、三角形の頂点であり、頂家を名乗れる者は一人しか居ない。現在の頂家は清川流志である。その前の頂家は、流志の母親の素子だった。頂家の下には、十人の家元があり、これ等の九割

まで、頂家の縁戚関係の者だった。

頂家直系の取り立て師匠がい、各家元の下にもそれぞれ取り立て師匠が居り、その下に、普通の師範格である名取りが居た。名取りの数は、数え切れない。

そしてこれ等の名取りが、一般家庭の弟子を持つていたのである。

右の關係は、清川流のたての説明だが、これを更に詳しく横に拡げて説明すると、次のようになる。家元は、会社で言えば、取締役のようなもので、清川流のために重要なことを頂家と共に決定する権利があるが、場合によっては、頂家の意見に反しても、決定権を持つ場合があった。だから、大株主的な存在でもある。

清川流の家元は十軒だが、血縁の近い七軒を上格家元、遠い三軒を下格家元と呼んでいる。血縁關係に無い者が、家元になるのは先にも述べた通り、殆んど不可能だが、一つだけ身受け（入籍）という手があった。

芸が凄く達者で、ジャーナリズムに持てはやさ

れている者の中には、稀れに家元への入籍により、家元となることが出来るが、これも、家元同士の権力争いで水がさされ、めったに実現されない。現在の家元十軒中、この方法により家元になったのは、東京の清川芳樹一人である。

しかし、無血縁の者でも個人的に有名になり過ぎれば、家元としてはほっておくわけには行かない。取り立て師匠というのは、それ等腕達者や有名者の不満を押さえるために出来た地位で、色々な場合、家元と同じ格が与えられていた。

取り立て師匠は、自分の推薦で、弟子に名取りの地位を与えることが出来た。

清川流の場合、名取りを取る費用は約十一万五千円だった。頂家が七万円、取り立て師匠が四万円取る。差額五万円は、諸計費。勿論これは標準で、各師匠により、多くなることもある。つまり免状用紙、箱代その他であった。

家元に属する取り立て師匠が、名取りを推薦した場合、頂家に入るべき七万円は、家元のものとなる。

だから、頂家としては、家元系の取り立て師匠が、金儲けのため、やたらに名取りを増やされては、自分の方の実入りにはならないし、頂家としての勢力がゆらぐので、かなり厳しい受験制度を設けているのが現状だった。

清川流の制度を簡単に示すと左のようになる。

頂家——取り立て師匠……名取り……弟子（直系）

上格家元——
下格家元——取り立て師匠……名取り……弟子（傍系）

子（傍系）

坂田実が、堀江芸者に紹介されて中学一年の時に内弟子として入門した清川満州は三十六歳の女師匠で、頂家直系の名取りだったのである。先ず、中の位というところか。

現在、他流儀で初めから日舞の師匠として立つ志のある者の中には、案外大学出が増え始めている。が、当時は内弟子として拭き掃除から始めたものが多かった。

2

実は十三歳から十六歳まで、必死になって稽古に励んだ。中学在学中だったが、彼が日舞を習っていることは、直ぐ同級生の間に知れ渡った。同級の女生徒の中に、やはり清川満州の弟子が居たのであった。彼女が告げたのだらう。彼女は貧乏な家の子供が自分と同じ踊りを習うのが不服だった。彼女は立売堀の鉄屋の娘で、大川和子という名だった。

「やい、男おとこ女めめ、一寸来い」

実は時々、腕白者から呼び出され、からかわれたり擲られた時があったが、どんな場合でも抵抗せず、あやまり通してあった。踊りを始めた当座は、男も女も端唄で練習し、女舞でしなをつける。実は時々隅で、一ト練習した。

だから、腕白者の命令によつては、彼等の前で、女の真似をして、彼等の機嫌を取った。中学時代では、小学校の時のように、彼を庇ってくれる者は居ない。いや、居たことは居たが、実は強いて

庇護を求めようとはしなかった。実の庇護者になろうとしたのは、中学生のくせに、不良仲間と交際しているような男だった。

実が、女性の真似をしてまで、彼を苛める連中の機嫌を取ったのは、彼等をそんなに怖れたためではない。

坂田実が怖れたのは、彼等ではなく、つまらない喧嘩をして、自分の顔に傷がつくことであつたのである。

実が中学を出、十六歳になった時、戦前とは較べものにならない程数は少なくなっていたが、芸者達の間でその美貌と踊りの旨さで実はすごく評判になっていた。

清川満州が、得意になって宣伝しまくったことも一因にある。坂田実は稽古熱心であつたと同時に、極力満州に氣に入られるようにつとめた。木下藤吉郎が織田信長の草履を懷中で暖めたと同じような手段も取った。

満州は色白の丸顔で、笑うと左頬下に笑窪が出来る。坐っていても、色氣がむんむんするような

女師匠であつた。

実は何時も、女中代りになって働いた。時には、女中を休ませて満州の肌着を冬、洗濯したこともある。

女性の心理というものは奇妙なもので、満州は実が少年であると、自分に言い聞かせることによって、実の行為を黙認していたようであつた。実ちゃん、と呼んで可愛がった。

実は満州に氣に入られようとつとめた反面、冷たい眼で満州を眺めていた。

清川満州には勿論旦那が居た。堀江の家具問屋の主人である。

満州は案外、外見には似ない貞淑な女で、その旦那以外、男がないようであつた。

旦那の名は高村音吉といい、かなりの財産家で、新町堀江ではかなり顔が売れている。

実が十六歳になった或る春の夜のことであつた。稽古が終わり弟子が帰ったあと、実は、何時ものように後片付けをしていた。満州の家には女中が居る。

満州が割合平気で、大きくなった実を泊まり込ませていたのは、そのせいであつた。高村音吉がやって来ても、同じ家に女中が居れば、変な眼で見ることはないだろう。少年だからと思う反面、そんな安心感もあつた。

ところがその夜は、女中の実家の母親が危篤になり、女中は帰つていなかった。

実は満州のために風呂をたいた。十四年前のことである。ガス風呂はそんなに普及していない。実は湯加減を見たあと、茶の間でお茶を飲んでゐる満州に言つた。

「お師匠さん、お風呂がわきました」

「そう、おおきに」

湯煙ゆけに曇つたガラス戸の外から、実は声を掛け

た。

「お師匠さん、背中をお流ししましょうか」

満州は即座に返事出来なかつたようである。この時、満州は実が最早一人前の男であるのを感じざるを得なかつたようであつた。

「ええわよ、そんなん」と満州は答えた。

普通なら実は、ここで湯殿の傍から去るところだつた。

二人は、湯殿の内と外で無言でいた。二、三分して、満州が言つた。

「実ちゃん、まだ居るの……」

「はい」

「背中流す言うたつて、ここのお風呂狭いし実ちゃんの着物びちゃびちゃになるやないの」

満州は少女のような言葉で言つた。

「それやったらお師匠さん、僕パンツ一枚になります」

「馬鹿やね、この子は。ええわ、背中流して。そうそう、不用心やよつて、玄関の鍵閉めといつてね」

と満州は言つた。

「はい、でも旦那はんが来はりましたら」

「六時頃から来はることあれへん」

湯殿の明りが消えた。清川満州はその瞬間、実を男にする決心をつけたようである。実は廊下でパンツ一つになり、ガラス戸を叩いた。相沢とみ

から性への手ほどきは受けたが、実は童貞であつた。流石に実は緊張し慄えた。性への期待もあつたが、満州と関係した後のことの方が、実を緊張させていたのである。このまま満州が、ずるずる実に溺れて来るようなら日舞の世界で出世しようという、実の野望は崩れ去ってしまう危険があつた。

爛熟した豊満な真白い女の肉体を前にしながら、十六歳の坂田実は、未知への欲望とその後の不安に慄えたのである。実は湯殿のガラス戸を開けた。薄暗く中ははっきりしないが、満州の姿はなかった。

直ぐ傍で、実は暖かい体温を感じた。はっとした時、満州はくすぐるような声で笑つた。

「実ちゃん、お風呂にお入り、うちが背中流してあげる」

と満州は下町の少女のような言葉で言つた。おそらく満州は、二十数年前の少女のような気持ちになつていたのかもしれない。

その夜、坂田実は初めて女の身体を知つた。実

の初めての相手が、四十歳の熟れ切つた女師匠であつたことは、実の野望に取つて、或る意味では幸運であつたかもしれない。

実は一夜で、男女関係の奥の奥まで、満州に教え込まれたのである。つまり坂田実は、普通の人間が思春期から青春期に持つべき、異性への神秘的な思慕感を知らないまま、大人の情事の世界へ、一足飛びに飛び込んだのであつた。その夜から、実に取つて女性は、欲望と出世への手段としてしか値を持たなくなつたようである。

実の不安は適中した。十数年、一人の旦那しか持たなかつた清川満州は、奔流のように実に溺れて来た。満州と初めて夜を共にしてから三週間め、実はこのまま、満州のもとに居てはだめだ、と思つた。

一つ家である。いくら隠しても女中に分からな

いわけではない。

実は左手に鉛筆を持ち、奇妙な字で手紙を書いた。宛名は満州の旦那である高村音吉であつた。文面の要旨は次のようなものである。

私は清川満州の弟子の一人であるが、お師匠と坂田実の間がなんとなくおかしい。私の見る眼ではお師匠の方が実を誘惑しているように取れる。

二人の間は、まだ潔白だと思われるが、それも時間の問題であろう。幸い坂田実の芸は素晴らしいし、実は芸の虫なので、実を清川梅香の弟子にしてはどうだろうか。清川梅香は頂家直系の取り立て師匠でもあるし、円満に二人の間を、芽のうちにつみ取ることが出来るようである。

坂田実は右のような手紙を、女性の文章で書いて、投函した。

高村音吉が、踊りの世界で、かなり顔が広く、若い時、一時、清川梅香のもとに興味で弟子入りしたのを知っていたからである。満州も梅香の弟子であった。

高村音吉は、人世の酸いも甘いも噛み分けた男であった。彼はこの手紙を読んだ時、この密告者の頭の良さに感嘆した。満州と実の関係については、薄々危惧の念を抱いていたのである。音吉は満州を愛していたし、二人が深みに入れば、抜き

さしならないところまで行くように思えた。

高村音吉も、この手紙の主が、まさか実自身だとは、夢にも想像しなかった。

土曜日の夜から日曜の昼にかけ、実家は家に帰るようにしていた。

音吉は土曜日、坂田実の家を訪れた。実はまだ小屋のような家に住んでいる。勢子は実の将来のために、金を溜めるのに夢中であった。日舞の世界で出世するには、いかに金が掛かるか、ということ、実はしつこく母に告げていたからである。

実が帰って来ると、高村音吉は、実の小屋の露地の入口で煙草を吸いながら立っていた。こんな穢いところに住みながら、よく日舞の世界に入りよった、と音吉は感心した。日舞の世界で名を出すには、大変な金がいる、一体何処からその金が出るのだろうか。遠くから、実は音吉を認めた。実の白い頬に微笑が浮かんだ。

坂田実は、高村音吉の十歩程手前で立ち停まり、丁寧な頭を下げた。